

真理を尊重せよ

学校長 太田 清史

本校が大正十二年に「大谷中学校」として新発足した際、第9代谷内正順校長により制定された四つの校訓の第一が「真理を尊重せよ」です。

「真理」とは、辞書には「真^{まこと}の道理」「どこでもいつでも通用する妥当な知識、認識」とあります。私は常々これを、「いつでもどこでも誰にでも通じる普遍的な価値」と表現しています。

親鸞聖人は、自らが開顕された宗教を「浄土の真宗」と呼ばれました。また和語の浄土讃歌である『和讃』には「念仏成仏^{これ}是真宗」とあって、「一心一向に念仏を申す時、一人残らず往生浄土（成仏）が決定する」ということのみが、真理であるとされました。『歎異抄』には「ただ念仏のみぞまことにておわします」とあって、「念仏＝真理」という法則が示されています。

念仏とは申すまでもなく「南無阿弥陀仏」と声に出して仏の御名を称えることです。「南無」はインドの言葉で「尊敬」を意味する「ナマッハ」を漢字の音に当てはめたものです。つまり「阿弥陀仏を尊敬せずにはおれません」という信仰告白が「念仏」だということです。

「阿弥陀仏」は「無限・無量」を意味するインドの言葉「アミタ」と「仏」の原語「ブツダ」から成っています。私は阿弥陀仏のことを「永遠の過去、無限^{かなた}の彼方から、私たちをどこまでも生かそう生かそうとするいのちの働きかけ」と表現しています。そういういのちの働きかけを受けていないものは地球上には一つもないわけで、阿弥陀仏こそが真理の表現なのです。それを声に出して称える行為が「念仏」です。

憲法では「信教の自由^{うた}」が謳われていますから、生徒たちに念仏を強要することはできません。しかし、「真理は一つ」であるべきですから、本校では念仏の極意を“To Be Human”というスローガンに置き換えて、教育を展開しています。

人間としての完成が、永遠の命を獲得することであるとすれば、畢竟^{ひっきょう}、往生浄土こそが、人間成就であるのです。ただしその時は、もはや人間ではなく、真理そのものとしての阿弥陀仏の浄土の住人と成らせていただくのですが・・・。